

大阪芸術大学の学生によるデザインプレゼンテーション。 新鮮で多様な表現を披露。

HIKIYAMA漆ガラスのデザインについては大阪芸術大学プロダクトデザインコースの道田健准教授率いる学生により、3回にわたるプレゼンテーションを経て、精度の高いものとなりました。

今回は道田准教授に本プロジェクトへの思いと、学生たちに何を獲得してほしいかについてお伺いました。



北村 まずは道田准教授の経験についてお伺いします。
道田 1970年に京都に生まれ、京都工芸繊維大学を卒業しました。その後はヤマハ(株)デザイン研究所で、音楽、ソフトウェア、スポーツ用品などのデザインをしていました。2001年に、プロダクトデザインを輪としたデザインと企業のコンサルティングを行うため独立しました。その後名古屋芸術大学非常勤講師、大阪芸術大学非常勤講師を経て、2016年に准教授になりました。

北村 ありがとうございます。次にデザインについての思いや考え方についてお教えてください。
道田 プロジェクトによって要求されることが変わりますが、開発に関わる人々、商品を購入して生活に取り入れてくれる人々など、一人でも多くの人に幸せを感じてもらえばありがたいと思います。

事業に参加したきっかけは、黒壁さんにお声かけをいただいたことです。参加を決めた理由は、学内的には他学科との連携により、学生同士の刺激が期待できるからです。魅力的なショップに商品を置いて頂けるという点で、学生たちにとってまたとない経験になると思いました。

北村 先ほど学生さん達にデザインを発表して頂きましたが、今回のデザインに対する先生の感想をお聞かせください。
道田 今のところは順調に進んでいると思います。ただ、製品の仕様や長浜の文化に対する理解がまだまだなので、継続して理解しようという姿勢が必要だと感じます。

北村 今回の事業を通して、学生さん達に学んでほしいことは何ですか？
道田 授業課題とのスケジュール調整、地域固有の文化からデザインの手がかりを探す力、商品開発におけるデザインと製造のプロセス、自分の力が社会の役に立つ実感という4つについてぜひ学んでもらいたいですね。

北村 ありがとうございます。最後に、今回の事業を含めた産学連携に対する思いや、期待することをお伺います。
道田 産学連携は社会に貢献する機会が増える素晴らしいことだと思います。本学の学生に期待して投資をしていただける企業側、経験は浅くとも将来の夢に向かって努力する学生の双方にとって、価値のある体験と意味のある結果を残したいと考えています。

北村 ありがとうございました。



伝統表現とガラス素材の融合。 若い世代から創出される新たな可能性を予感。

大阪芸術大学プロダクトデザインコースの学生が提案する「HIKIYAMA漆ガラス」のデザイン群。長浜曳山まつりで奉納される「子ども歌舞伎」で纏う衣裳の柄と、子どもの可愛らしさを連想させる器のフォルムを様々なビジュアルを活かした表現となりました。

2回に渡る「HIKIYAMA漆ガラス」デザインのプレゼンテーションを終え、子ども歌舞伎の振付を教えておられる「かわ重」の川村和彦さんや、長浜で江戸末期から蒔絵技術を継承している4代目「蒔治」の下司貴之さんのアドバイスをデザイン要素に取り入れながら、学生の3回目のプレゼンテーションでは精度の高いデザイン発表となりました。学生の声としては、「今回のプロジェクトで産学連携によって交流の場が広がった事や歌舞伎の魅力発見、普段は関わらないガラス工芸科との連携ができて良かった」等の声がありました。最終的にプレゼンテーションの中からは5つの器の形状と、子ども歌舞伎外題5つから抽出した装飾柄を2~3バターンに絞り込み、実際に形成されたガラスに描いて完成に近い試作品を作成していきます。

(つづく)

